株主優待

シロガネユキ

株主優待

「株主優待」シロガネユキ

　都内にある化粧品会社、牛川化粧品のオフィスに、突然吸血鬼が現れた。既に定時は過ぎ、時計の針は二十時をまわった頃の出来事だった。

　社員の殆どが会社を後にしていたが、近く株主総会を控えた総務部職員達の多くは残業をしていた。

　吸血鬼は見るからに吸血鬼という風貌だった。

　いきなりオフィス中が黒い煙に包まれたと思ったら、たまたま不在だった総務部長の席にどっかりと、その吸血鬼が座っていたのである。

　吸血鬼は肌の色が真っ白で、黒髪をしていた。体にぴったりあった黒いスーツの上に長いビロードの黒マントをまとっていて、赤い蝶ネクタイをしていた。周りには数匹の蝙蝠が飛び回っていた。

　彼がそんな格好をしているものだから、職員たちは彼が名乗る前から彼が吸血鬼である事を察していた。

　隣席の斎藤芳子なんて思わず、「ドラキュラ様でございますね」なんて言う始末だった。

　吸血鬼は低く響き渡る声で話しはじめた。

「おい、せっかく吸血鬼様が来たって言うのに、トマトジュースの一つもださないのか、ここの会社は」

「あ、あの……トマトジュースはただ今切らしておりますので、お茶でよろしければすぐにお出し出来るのですが……」

「馬鹿な事を言ってるんじゃない。トマトジュースが無ければお前の血を頂くまでだ。とっととコンビニに行って買ってこい」

「は、はい。畏まりました！」

　斎藤芳子は飛び上がり、財布も持たずに走り去った。

「きょ、今日は、どのようなご用件で」

　一番近くにいた課長の新山真二が、おそるおそる吸血鬼に話し掛けた。

「うむ。この会社は一体、どうなっているのだね。聞けば今期の最終決算報告予想は、大幅減益と言うではないか。現在の株価下落の責任をとって、自社株買いでも何でもいいから、きちんと対策をとってくれないと困るんだよ」

「はあ……ひょっとして吸血鬼様は弊社の株主様でいらっしゃいますか」

「決まっているだろう、だからこうしてわざわざ現れたんだ」

「でも、弊社の株の事に関しましては、主幹の証券会社と色々と話し合った上での事ですから、わたくしどもと致しましては……」

「馬鹿野郎、お前達は自分の立場がわかっていないようだな。俺様をこれ以上怒らせてみろ、ここに居る社員全員の血を頂く事だって出来るんだからな」

吸血鬼は真っ赤な唇をカッと開け、白く鋭い牙をむき出して笹川を睨みつけた。

「ひ、ひい！」

笹川はあまりの恐ろしさに腰を抜かし、その場にしゃがみ込んでしまった。その様子を見て他の社員が悲鳴を上げる。

「何度も言わせるな。ほんの気持ちでいいんだ、とにかく何か対策をとるか、いい材料を出すと約束さえしてくれれば、お前達の命は助かるんだぞ」

「か、畏まりました。吸血鬼様のお言葉は真摯に受け止め、株主の皆様に出来るだけ還元できるように今後、心がけます。きょ、今日の所は、こ、これを……」

笹川はデスクの中から紙包みを取り出して言った。

「弊社の新製品でございます。株主の皆様に配当の他に優待として差し上げる予定の品です」

「ほう、それは悪いな」吸血鬼の目がキラリと光った。どうやら吸血鬼はこういうものが目当てだったようである。

笹川は吸血鬼の喜ぶ表情を見て、ほっと胸をなでおろした。

「で、この中身はなんだ？」

「はい。汗にも水にも負けない日焼けどめでございます。SPF120の強力タイプです。あ、それに焼きたい方の為にサンオイルもお付けしました」

吸血鬼は少し得意げに自社商品を説明する笹川の首元に、無言で噛み付いた。

了